# 写真あれこれ

〈水野忠明氏の写真講座に出席して〉

空はなぜ青い、夕陽が赤いのはどうしてか、遠くの山が青く見えるのはなぜだろうで、始まった水野さんの写真講座は、私の意表を突いて、本格的な基礎理論からスタートした。

写真暦四十年の私の自負心は、いとも簡単に打ち砕かれ、柔順な生徒にされてしまった。

見事なプロの感覚と自信、そして的確な指導に私は完全に降参した。

水野さんの若い頃の一枚の作品を見て、深い感動を覚え、思わず「私に譲って下さい」と声がでかかったが、ぐっとこらえた。プロとアマの違いは、囲碁でも痛い目にあい、ここ三年碁石を握ることもない私である。写真で又プロのすごさを見せられ、意気消沈してしまった。

気をとり直し前の作品を引っ張り出し眺めて見た。どれを見ても写真にはなっていないのである。昭和五十二年平戸大橋の竣工の際、私は朝夕三百枚近く写真を撮り続けたことがある。できた写真を田平在住の写真家に見せたら、全く批評をしてもらえなかった。最後に「写ってはいるですね」の一言であった。

一枚の写真を撮影するため、一年余りも通い続け、シャッターチャンスを待ったという水野さん、土の中の昆虫の生態を撮るため、ユンボーを一ケ月近く借りた写真家の例などは、プロ独自のものだとは思うが、その気迫だけは学びたいものである。水野さんが福島は写真になる風景が少ないとこぼされた。それにしても数少ない場所から私の想像もつかない点を選び、撮られた作品のすばらしさ、観察力の確かさは、アマの到底及ばないものであった。

話を聞くだけで、写真が綜合芸術だといわれる理由が、なんとなくわかるような気になる、プロの迫力ある講座であった。

福島へ帰郷する度に私を誘い、展望台に日の出の撮影に行く知人がいる。撮ったフィルムは百本近くなると思うが、できた作品は一度も見たことがない。尋ねると気に入ったのがないからみんな捨てるという。なんとそれが十年以上も続いているのである。朝早く起こされる私こそいい迷惑だが、いつもうまい土産を持って来るので、仕方なく同行している。私が日の出の写真を送ったら電話があり「ありゃあー写真じゃないよ」。全く腹の立つ一声で電話は切れた。

正月も近くなり又彼が東京の虎屋の羊かんを持って、朝早く私を起こしに来るだろう。彼の作品を見ることは、もうあきらめているが、羊かんが欲しいので、今後も展望台に登り続けるつもりである。

女の人の写真を撮るのは、私は最も苦手である。実物以上に美しく仕上げないと、けなされること間違いないからである。

どの方向からどのように撮ったら欠点をかくし、いい面を出せるか、いつも頭が痛くなるのである。

しかしどう工面しても、美しく撮れない女性もこの世にはいるものだ。こんな時は「生まれ変ってー」と叫びたくなるのである。私は実物より美人に撮れなかった写真は、絶対に渡さないことにしている。

つい最近も「写真はまあだあー」と催促する女性の方がいて、私は弱っている。写真はできているのだが、実物そのままなので困っているのである。私がしょんぼりしていると、「写真機にフイルム入れなかったのでしょう」と言う。黙ってうなずいたら「しっかりしなさいよ」と同情的な眼で見つめられ、がくんとなった。

結婚前の妻は、私の作品は写真に限らず、なんでも優しくよくほめてくれたものである。

それが結婚後は、プロ顔負けの辛辣な批評家に変化したのである。「文協いろは」が発行されたら、文法にうるさく私の文章は正常ではないと思っているらしい妻から、やられることは決定的である。その時は原稿依頼者の小川さんを怨むつもりである。

日本丸寄港の折、淺谷、平野、福崎には百名近くのカメラマンが待機した。私は一人のプロカメラマンに目をつけ観察した。ファインダーをのぞくだけで、なかなかシャッターを押さない。そのうち「絵にならない、向きが悪い、ちったーこっちの身にもなって見ろ」とぼやき始めた。

船が近づいて来たら「船長たのむー」と叫びだした。こんな人につきあっていたら大変だと思い、私はシャッターをきり始めた。あのプロの人は一度もシャッターを押すことなく、島を去られたと思う。

プロの悲哀、そんなものを私は感じた。

旅行中私は一軒の農家の火事に出会ったことがある。消火に手助けしなければと思いつつも、この機会

を逃してはと、写真を撮り続けた。
その夜の宿では、後味の悪い思いで朝まで眠れなかった。
翌朝現場を通りかかったら、小雨の降る焼跡に一人の老人が力無くうなだれていた。私はフィルムのある限り撮りまくった。シャッターを押しながら、なぜか涙がボロボロ流れた。
その中の一枚が入選した。審査員の評は「なにも説明はいらない、見ているだけで胸が熱くなる。偶然の傑作であろう」であった。それ以来私は偶然を待つ。しがないカメラ愛好者になったのである。
私の母が百才を過ぎた頃、ひどく生まれ故郷をなつかしがるので写真を撮りに出かけた。母が幼い頃遊んだであろう山や川、幾らか昔の面影の残る生れ育った家などを撮りつつ、母はどのような青春時代を送ったのであろうかと想った。
母はその写真を一枚一枚ゆっくりと見ながら、懸命に昔の記憶を追っている様子だった。
一枚の写真を何時までも不思議そうな顔で見ているので「なんば見とるな」と尋ねると「これはどこの田んぼな」と言う「ばあちゃんの実家たい」と答えたら「違うばい、うちの田んぼはこがんしとらん」と言う。考えてみると農地改良で昔の面影は全くなかったのである。
思えばこれが私の最後の親孝行になった。
東南アジアに写真を撮りに行った際、自動シャッターを使用中、原地の一人の少年があっという間に写真機を奪い走り出した。給料の一ヶ月分で買ったものであり、私は必死に追いかけた。幸い通りかかった中年の女性が少年を捕え、写真機を取り返してくれた。ところがその女性がタガログ語で何やら私に文句

を言いだした。ゼスチャーから判断すると、金を支払えとわめいている様子、異国の空では強気になれず、結局十五ドルとられた。

その後ホテルの前で、この少年と女性がいかにも楽しげに語り合いながら、デパートに入って行く姿を見て、私は唖然となった。見事な母と子の協同作戦だったのだ。

古・近代絵画展の時の私の写真を見ながら、梶原教育長「おーっ、よう撮れとる、よっぽどレンズの良かとですばいね」。

私は数枚の写真を渡すつもりでいたが、出来の悪い一枚を差し出し、公民館を出た。

私の写真技術を認めてくれる人は、当分現れそうもない。